

## IT CONFERENCE 2002 開催

JGSプロジェクト・チームも、セッション発表に活躍。多彩な技術情報の交換が行われました。

IT CONFERENCE 2002(日本GUIDE/SHARE主催)が、4月25日(木)、26日(金)の両日にわたって、ウェスティン都ホテル京都にて開催されました。「ネットワーク社会の驚異と脅威」をテーマに、インターネットをはじめとするコンピューター・ネットワークの驚異的な発展と、それに伴ってますます重要度の高まるセキュリティを中心に展開された豊富なセッション。今大会には600名以上の会員の方々が参加され、貴重な情報交換やコミュニケーションの場となりました。

### ネットワーク社会を多面的に検証

オープニングに続く基調講演では、内永 ゆか子(日本アイ・ピー・エム 常務取締役 ソフトウェア開発研究所長)が登壇。「ネットワーク社会インフラのトレンドと展望」のテーマの下で、e-businessのインフラストラクチャーを支える技術の驚異的な進展に伴って登場したインテリジェント・ネットワーク・サービスやWebサービスなどを紹介。リスクや脅威への対策にも触れ、今後の

ビジネスと社会への対応を提言しました。

基調講演に続くセッションでは、「ネットワーク」セキュリティ」「e-ビジネスと先進アプリケーション」「IT部門戦略」「e-ビジネス開発ツール」「e-インフラ」「IBM最新情報とテクノロジー」の7会場に分かれ、より具体的で実践的な

セッションが2日間にわたって開かれました。

さらに最終日には、今大会の締めくくりとして作家 立松 和平氏による記念講演がありました。

日本GUIDE/SHAREでは、活動の一環としてプロジェクト・チームを毎年編成することで、会員の方々の技術向上や技術交流を積極的に支援しています。2002年度(2001年10月~)も、「情報システム企画部会」「ネットワークソリューション部会」「リソースマネジメント部会」「WEB&エンジニアリング部会」「システム製品部会」の各部会で、全43チームがそれぞれのテーマの下に研究活動を進めています。

IT CONFERENCEは、そうしたプロジェクト・チームの研究成果

の発表の機会ともなっています。今回のコンファレンスも、7件が昨年のプロジェクト活動で優秀論文を受賞したチームの発表でした。

そこで今回の取材では、発表を行った二つのプロジェクト・チームにフォーカスを当て、セッションの内容と、プロジェクトへの取り組みについてお聞きしました。



セッション風景

「我々SEが目指すコンサルタントの定義と育成についての考察」

コンサルテーション技法チームによる研究成果の発表です。講師は、チーム・リーダーの松本 学氏(株式会社住友金属システムソリューションズ)が務めました。

同チームは、コンサルテーション技法の体系的な整理を試みることから活動をスタートしました。

「メンバーの募集に当たっては、“コンサルティングの実務経験のある人”ということだったのですが、蓋を開けてみるとほとんどのメンバーが未経験で、スタート当初は大変だったんですが、そのぶん新鮮な取り組みができたと思っています(松本氏)。

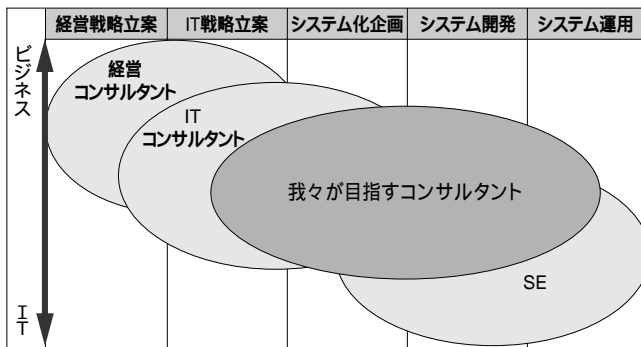
研究を進めていく過程で、各メンバーの所属企業には「コンサルタントとしての能力やスキルを身に付けた人材が不足している」「既存のコンサルタントに十分満足できていない」といった共



記念講演



コンサルテーション技法チームの皆さん  
(前列左から高橋氏・松本氏・長谷川氏・中村氏・田中氏)



「我々SEが目指すコンサルタントの定義と育成についての考察」の発表資料

通の悩みがあることが判明しました。そこで真に求められるコンサルタントとは何か、その人材を育成するにはどうしたらよいか、という面に研究範囲を広げ、メンバー内で議論を重ねていきました。とはいっても、業務の合間の活動となりますから研究はなかなか進展しません。

「定例会などで集まったときには議論が白熱するのですが、会社に戻れば業務優先ですし、連絡も滞りがちにならざるを得ません。そこで論文の章立てに合わせて小チームに分けて頻繁にメールをやり取りすることで、活動を活性化させていきました」(中村 公則氏：株式会社クリス)



「5月に京都で行った合宿が大きかったですね。そこで論文の方向性が固まりましたし、その後の活動にも弾みがつきました」(田中 孝直氏：第一生命情報システム株式会社)

こうした活動の結果、同チームでは、ITコンサルタントとして、企業がシステム

を構築する際にアドバイザーとして参画し、システム化のみならず、稼働後の評価まで一貫して関与し続ける人材。すなわち「経営」と「IT」をつなぐ役割を担うITコンサルタント像を描きました。こうした人材を育成するには、企業内にコンサルティング部門を置くとともに、専門スタッフとしてのキャリア・パスや育成制度が必要であり、社外コンサルタントとの協働によりノウハウを吸収する機会を設けることも有効であるという結論に達しました。

「プロジェクト活動の成果として、コンサルティングへの理解が深まったということもありますが、毎月の定例会を各メンバーのオフィスで持ち回りで開くことから、それぞれの会社の仕事ぶりを目の当たりにしたり、お話を伺うだけでもずいぶん勉強になりました」(高橋 昌之氏：株式会社アイ・ティ・フロンティア)

「親会社の金融系のシステムを担当しているのですが、社外向けのシステムを担当しているメンバーや、製造系のメンバーと話をするだけでもずいぶん触発されることがあります。なによりも共通の目的や悩みを持つ友人ができたのが、プロジェクト活動の最大の成果かもしれません」(長谷川 彰氏：第一生命情報システム株式会社)



なお、チーム・リーダーの松本氏は、後述するS/390®-IBM技術者認定試験にも合格を果たすなど、講師役としてだけでなく、一人何役もの活躍となりました。

「仮想企業によるCRMシミュレーション～我々の考えるCRMの実践～」

CRMチームによる研究成果の発表です。講師は、チーム・リーダーである城田 亮一郎氏(東陶機器株式会社)が務めました。

企業の生き残りをかけた戦略としてCRMが目目されていますが、同チームは、一般的なCRMの導入のアプローチではなく、仮想企業を対象に具体的な導入・実践方法を研究することで、より有意義な成果を上げられるのではないかと考えました。そこで「高級釣り竿の老舗」を仮想企業として設立し、各メンバーが仮想企業における課題を解決するためのCRMを考察・シミュレーションし、その効果を評価することにしました。

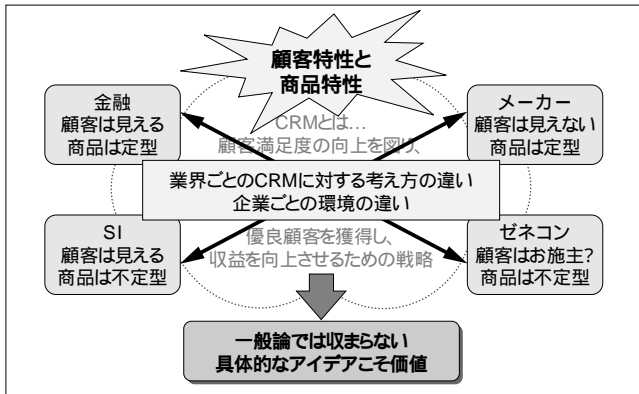
具体的には、インターネットの特性を生かした商品 / 販売戦略を構築するというCRMに取り組み、「新規顧客の開拓となる商品開発」「既存顧客の囲い込みとなる商品開発」「釣りに興味を持つ人を対象としたサービスの提供」という三つの側面からその効果を検証しました。



CRMチームの城田 亮一郎氏

城田氏は、プロジェクト活動を次のように振り返ります。

「今になって思えば、かなり活発に議論したことがプロジェクトの成功に結び付いたかなと思っています。メンバーのほとんどが東京で、私一人が九州なのですが、定例会で集まったときには、人間関係の構築という意味もあって必ず飲み会になりました。結局、翌朝の始発



「仮想企業によるCRMシミュレーション」の発表資料

の飛行機で会社に直行していたのですが、それでも十分に活動を楽しめました。もともと人に会うことが好きですし、動き回ることが嫌いではありませんから。

むしろ苦しかったのは、1年間で結果を出さないといけなかったことです。見ず知らずのメンバーが集まって、しかもそれぞれの知識レベルが異なっている段階でのスタートですから、足並みをそろえるまでが大変でした。また、プロジェクトの最後には、メンバー全員で分担して書いた論文をまとめる作業があったのですが、単純に皆が書いたものを並べていくだけでは論文になりません。整合性を取りつつまとめ上げるのに苦しみました。そういう意味では、短い期間にそれなりの成果を残せたのではな

いかと思っています。

ただ、その成果を会社に持って帰って実務にフィードバックできたかという、別の面があることも確かです。今回のプロジェクトでは企業戦



略的な研究に取り組んだわけですが、私たちは社内において必ずしも戦略を策定する立場にあるわけではありません。研究内容を実務に直結させることはできないのです。とはいえ、上から降りてくる戦略を咀嚼する力は身に付いたと思っています。

チーム・リーダーを1年間務めさせていただいて感じたのは、リーダーだからといって、研究テーマについてほかのメンバーより詳しい必要はないということです。むしろ、成果物を作り上げていくには、プロジェクトを前進させるためのリーダーシップが大切です。私にとっては、CRMの知識よりも、そちらの面で得たものが大きいと思っています。例えば、仮想企業のモデルをメーカー系にするのか、金融系にするのかといったことで、なかなか結論が出なかったりするわけです。そうした状況でいかに判断を下し、プロジェクトを前に進めていくか。そういった経験が、非常に勉強になりました。

ぜひ機会をつくって、また別のプロジェクト・チームで活動したいですね」

## 世界初のS/390-IBM技術者認定試験に合格率60%

コンファレンス参加者の特典の一つに、会場内で無料でIBM技術者認定試験が受けられることがあります。この認定試験は、11の製品分野に50種類以上の認定資格があり、80カ国以上で実施されて、国際的に通用する技術力の証となっています。

今回の大会では、世界で初めてS/390-IBM技術者認定試験が行われ、受験者の60%の方が合格を果たしました。



試験会場風景

世界初の合格者を代表して、増子 博氏(株式会社エクサ)と野沢 正史氏(株式会社トバックス)にコメントをいただきました。

「今回の大会は、認定試



増子 博氏

験が最大の目的でしたから、うれしい反面、ほっとしています。ホスト系を担当しているスタッフにはぜひ受験を勧めたいですね」(増子氏)

「今後は周りから資格認定者ということで発言を求められることになるでしょうし、そういった立場でお客様やスタッフに対応していかなければいけません。むしろこれから大変だと思いますが、今まで以上に積極的に仕事に取り組んでいきたいと思っています」(野沢氏)

験が最大の目的でしたから、うれしい反面、ほっとしています。ホスト系を担当しているスタッフにはぜひ受験を勧めたいですね」(増子氏)

「今後は周りから資格認定者ということで発言を求められることになるでしょうし、そういった立場



野沢 正史氏

# SHARE-US 参加報告

米国SHAREの大会に、JGS会員が参加。  
各国技術者との貴重な触れあいを体験してきました。

米国テネシー州ナッシュビルにて、3月3日(日)~8日(金)の6日間、SHARE-テクニカル・コンファレンスが開催。米国を主体に各国のITプロフェッショナル約2,000名が集いました。日本GUIDE/SHAREから参加した宮下 博志氏(エスアイ・ソリューションズ株式会社)と磯田 純平氏(株式会社クリス)に大会の雰囲気レポートしていただきました。



左:宮下 博志氏、右:磯田 純平氏

ナッシュビルは、こんな機会でもなければ一生行かなかったかもしれない街です。24時間まるまるかけて到着してみると、本当に静かな田舎町。とても州都という感じではありませんでした。そんな中、忽然と現れたオーブリーランド・ホテルは「さすがアメリカ」と思えるほどの大きさと、中庭でさえ野球場ほどの広さがあり、これからの一週間に期待を抱かせるに十分です。

到着早々、会場となるコンベンション・センターへ下見に出掛けました。まだ設営中でしたが、大小の部屋を一体幾つ使うのかというほど広いスペースで準備が進んでいました。

その答えは早速分かりました。

初めて参加する人のために、「なぜ私たちはSHAREに参加するのか?」という講義が開催されるのです。

- 私たちは、自分たちの仕事で得た経験・知識をそれだけにとどまらせない。
- 同じ仲間の得た経験・知識を共有化し、より良い知識・技術を生み出す。
- 会社に戻ったら実践し、また来年戻ってくる。

後は、明日配られるアジェンダを見てくださいということでクローズします。

アジェンダは、まるで大学の講義要領。1,000コマほどの講義概要が列挙されています。分野ごとに分かれているとはいえ、この数には圧倒されます。しかも早い講義は朝8時から、遅いものは午後5時から始ま

ります。「これで体が持つのか?」という心配がよぎりました。

実際、講義を受けてみると、これがまたエネルギーギッシュです。ストーリーがないわけではありませんが、とにかく自分が伝えたいことをとめどなく話し続けるという感じです。しかしながら、彼ら特有のユーモア(残念なことにわれわれの英語力では、なかなかタイミング良く笑えませんでした)をはさんで発表するので飽きるということはありません。

プロジェクトマネジメントの分野を中心に受講しましたが、その中で感じたのは、

- 自分の意見を、その考えに至った論理とともに主張する。
- 講義が予定通りに終わらずとも、意見を交わし、話が発展的になるのであれば、それでよい。
- 主張するだけでなく、相手の言うことをきちんと聞く。

とにかく討論の仕方がうまいなあと感じました。

セッションは1時間ですが、スピーカーが話し出して10分もすると受講者から次々と質問が飛び出します。受講者も自分の考えを述べ、それに対する質問も出てきます。国内ではほとんど見られない活発な意見交換が行われ、あっという間に時間がたっってしまう。もっとも最後には、スピーカーがうまくまとめ、ほぼ時間内で終わっていました。やはり入念な事前準備をしているのでしょう。参加したセミナーのほとんどがこういう状態であり、オープンでリラックスした雰囲気と参加者の積極性が印象的でした。

夕方には、参加者同士の交流を図るためのSCIDSという簡単なパーティーが催されました。そこで知り合ったエンジニアと触れ合う

ことができ(英語で十分な意思疎通ができていないのが残念)彼らの熱意・積極性を感じ、元気をもらってきました。皆IT業界に明るい希望を持っています。もちろん話題はITだけではありません。政治・経済・文化など実に多彩です。彼らと夢や希望を語り合えるように英語を勉強し直して、ぜひまたSHAREに戻ろうと決心している自分に気がきました。

